諸君願くは爲に皷する琴瑟に燕樂し爲に勸むる一杯の旨酒に吾人が微意を酌まずや

聊か以て辭となす（無外）

生の充實

◎詩的空想に驅られ美しく此世の中を見美しく考へ憧憬と功名との中に生きて居る中は幸である太平無事である恰も春の海の如く日ねもすのたり〳〵と何等の逡巡躊躇もなく理想に向ひまつしぐらに進むことが出來るが吾々は人生に生きてゐるいつまでもそんなに麗しいエデンの園に樂しく暮してゐることは出來ぬ一度現世の苦しい經驗にあひ冷かな現實のしともの下に立つとさあ夢想時代の世界とはまるで世の中がちがつて來る

詩的空想時代の自分の作つた世界は奇麗なものであつた人と云ふ人は皆愛情が濃かで親切でにこ〳〵してゐるのだと考へた慈善事業は皆佛樣の樣に慈善深い御方々かあはれいとしいと思ふ心からやつてゐられるものだと考へてゐた忠君愛國をとき勤儉尚武の道を鼓吹するものは皆内には熱血漲り誠情溢れてゐ

龍南

卒業生諸君を送る

杜鵑一聲空を裂いて天下綠に入りぬ　原頭草萠ゐて燕子低く飛び　龍山翠深うして薰風徐ろに動く。正に是れ鵬勃の氣天を突くの秋也

諸君は實に此時を以て校門を出でんとす

嗚呼　胸裏萬斛の雄圖を抱いて靜かに鵬勃の天地に立つ、恰も是れ垂天の鵬翼、九天の雲を睨んで萬里の風を待つが如けむ。諸君の心事、豈に快ならずや

諸君を送るに臨み吾人は唯默せんとす。吾人の諸君に期待するや寧ろ其の多きに苦しむ。然も默する所以のものは默するの却つて煩言絮說に勝る場合あること知れば也。冀くは諸君默契せよ焉。

送らん哉　歌はん哉　祝はん哉別呦鹿鳴食野之芩我有嘉賓皷琴皷瑟皷琴和樂且湛我有旨酒以燕樂嘉賓之心。

るものと思つてゐた
所が世の中には表裏あることが分りあらはには正義を標榜しながら陰にさもしい卑劣な考を持つてゐるものがあることが分り段々世の中が情なくなつて來た尋常小學位に通つてゐる頃先生からきかされた話は孝子の物語り義士の逸話であつた中學に居る時修身で敎はることは本務とか義務とか云ふ四角張つたものであつた其上其時分は家の事情をきかされることもなし苦しい經驗をなめるでもない人生のブライトサイドをのみ見て居たためまるで坊ちやまの樣で世間見ずであつた
が昔の夢は破れた段々社會と接する樣になり人生のダークサイドを知ると恐ろしい戰慄を感せずにはれられない忠君愛國博愛と云ふ團魂の樣に思つてゐた社會に詐欺、姦淫、窃盜、あらゆる罪惡が行はれる顏では笑つてゐても內心では嘲罵輕悔の念を以て迎ふるものも決して少くないと知つた
自分は冷酷なる現實が次第に暴露せらるゝに從い次第に自分の美しい箇所を運び去られる樣な氣持ちがした今迄總ての人を信賴してかゝつた奴がもう猜疑の眼を以て見る樣になつた
長谷川天溪の現實暴露の悲哀もこらあたりの消息を洩したものである、ハムレットは此世がいやさに此身の露となりても消ねよかしと人生を呪つたしかし吾々は此世がいやだからと云つてどうともすることも出來ぬ草枕でこんなことが云つてある「人の世を作つたものは神でもなければ鬼でもない矢張り向ふ三軒兩隣りにちら〳〵する唯の人である唯の人が作つた人の世が住みにくいからとて越す國はあるまいあれば人でなしの國へ行く計りだ人でなしの國は人の世よりも猶住みにくからう」
人間生存の意義は生を愛することにあるどうしても吾々は現實の中に頭を突きこんで生きねばならぬ生きる以上は煮ねきらぬ皮層な生活ではあきたらぬ飽く迄生活を充實せしむる樣に努力せねばならぬ
生活の充實これ現代の人が悉く希求して止まないものだらう然るに天下多くの青年は充實せる生活を送つてゐない何か胸に痛痒を感じてゐる
自分がこゝに論ずる生の充實と云ふのは何んでも自分の欲求さへ充たせばよいと云ふ樣な半獸的のこと

でない吾々が日常生活に於て何か一定の主義方針があり全心全力をあげて此方に進むの意義である束の間束の間の口体耳目の欲望さへ達せらるれば他人はどうでもよいと云ふ樣な利己的のものでないエターナルな眞理にすがり絶ず努力すると云ふ意である

生活の根本主義がきまらねばどうしても動搖する煩悶する欠陷を感ずる生活の根本を知りこれを求めて努力勉勵する人が天下の偉人である

孔子は生の標的を仁にありと自覺しクリストは愛にありと悟り藤樹先生は良知良能にありと意識し放蕩息子は酒と色にありと考へ田舍の田吾作は鍬と鋤にありと思つた顏のちがつた樣に智識の高下に從ひ生の根本意義を解釋するのも種々雜多であるがこれはこうと信じて生活してれば何の苦悶もない

自分は今昔の甘い夢から醒めて生の歸趨を失つてをる迷つてるがこんな狀態にあるものは自分一人ではあるまい天下大低の青年はこの苦い經驗を嘗めてれることだらうと思ふ

學制改革も必要である每日の下調べも肝要だ酒と女を遠ざけるも善い事であらう

が總ての基礎となつてれる生活の根本義を今の青年がよく得心が行く樣にヒントヲ與へてやることは焦眉の急ではあるまいか(空)

冗者冗言

○二三年前、學校の歸途に、水車小屋の傍に一老人が屍骸となつて横たはつて居たのを見た事がある。何でも川の中に落ちこんで水車に嵌つて死んだのらしい。頭の一部は無殘に碎けて腦が白く露出して居た、巡査も居た、見物人も居た、やがて廣い荒莚で骸をぐる〳〵に卷いて人夫が二三人で何處かへ運んだ。其時水に膨れた二つの足が荒莚の端から不恰好に出て居た、その二つの足が今も私の記憶から離れない。

○其後私は記憶の底からこの二つの足を喚び起す每に其老人の死に就いて考へざるを得なかつた。――

――くら闇の川畔を一老人が歩て居る。忽ち小石に顚いて嗟夫！と思つた時は老人はもう水中にある。水の流に抵抗することが出來ず老人は水車の方へ導かるゝ。水車は容赦なく老人の頭を碎く。老人は微

かに最後の息をつく――。

○吾人は小石に顛くまで死を自覺しなかつた。恐らく彼は一杯機嫌の鼻歌であつたかも知れぬ、どうして數分間の後に冷たい屍骸として自己を見出すことを豫期しやう。斯くて老人は明るい所から暗い所へ飛び込んだ。其の一瞬間、其の一切那、老人は兼てから恐ろしくて厭であつた「死」の關門を苦もなく押し破つて仕舞つた。

○私は老人が顛いた石、――一塊の石がすでに彼の生死を決定するに十分な物だと思ふ。川畔に横はつた石、石に顛いた足、これ等を溯つて考ゆるから因果の鎖が遠い遠い昔から連つて居るのを發見するだらう、しかし私は今その因果の鎖を或程度で押し切つて之を偶然と稱する。然らばこの老人の死は確かに偶然である。

○無限の闇黑を過去に曳き、無限の闇黑を未來に控へて其の極微の間からチラ〳〵と光明が輝いたもの是か「生」ではあるまいか、否更に一歩を進めて無限に始り無限に終る闇黑の一部が裏返つたものが即ち「生」ではあるまいか、其の生を受くるや既に偶然である、而らば其の生を棄てるや亦偶然なのは理なことである、故に私は死をも偶然と云ふ。

○不慮忽焉、無常迅速など偶然を悲しむ人間の聲は實に人生の偶然性を證するものである、偶然に始り偶然に終る人生がどうして偶然でない事があらう。「偶然」――更に一歩踏みこんで極言すれば「無意義」ではなからうか。荒荒の間から見ねた溺死老人の二つの足は私に深く此の無意義を語る。

○私は此處まで書き來つて一顧をなした時、生や死やを研究し、死生觀や人世觀やを叫號し、更に東西古今の學識を引例して全力を之が討究に盡して居る人々に對し、自說があまりに速斷の見、孟浪の言を敢てしたやうで甚だ濟まない氣がする。然し 2+2=4 が眞なることを共通に確かめた人は、其何故なる乎は更に各自で解釋すべき問題である。此處になると全く情緒的に自分で滿足の出來るやうな解釋をつけるより外はあるまい。これだけ一寸斷つて更に進むことゝする。

○廣々漠々の沙漠、これが人生ではあるまいか。この間に湧き出た沙漠の兒は實に人間である。沙漠は廣

い、別に何處へ行けと定まつても居ない。沙漠の兒は只足の向いた方に歩く。何處へと志す目的もないから、隨て其の目的に辿りつく道もあるべき筈はない、歩かねば自己の生存に堪へぬ所から只歩く。東に向つて歩くものが豪いもので西へ進むものが豪くないといふ譯では無論ない。

○赤い太陽が赤褐色の沙漠を照して毎日々々東から西へ回る。夜は億萬の星華燦として彼の圓穹を飾り天の川が美しく流れる。一夜何萬何千哩の大光芒を曳いて大彗星が傲然として東天に現はれた事もあつた。大きな水盤に微々たる塵埃が浮きつ沈みつ、左に右に動くやうに、廣い廣い宇宙を太陽や星や彗星が頻りに動く。この間に在りて誰か是等の意義を見出すであらう乎。

○之を時間的に見るも之を空間的に見るも無意義なる人生は實に無意義である。茫漠の野に獨り立つた人間は、其が花が好きなら花の下に走る。水が欲しいなら溪水へと走る、無暗に驅け回るのが面白いと思ふものはグル〳〵と野原を走る。動くのが面倒と考へる連中は坐つたまゝで動かぬ。

○是に於てか無意義の人生に在りて意義なる聲が叫ばるゝ。花好きは花を以て人生第一義と號して居る。驅け回る事に興味を持つた者は奮鬪努力を以て人生唯一の主義と心得る。要するに主義は義務觀念から出たものではない。人間各己の趣味が凝つて成つたものである。

○古い型に囚はるるなと若い人が叫ぶ。殘つた形骸に膠着することなくして新い自己を見出せと叫ふ。更に新しい地盤に立つて新しい空氣を吸へと叫ぶ。併し私は思ふ。囚はれるなと叫人は却つて囚はれた人ではあるまいか。

○私も亦囚はるゝことをかからん事を叫ぶものである併し私は決して古い型を捨てるなと云はぬ。殘つた形骸を破壞せよとも申さぬ。古い型や形骸に滿足する人はそれで澤山である、眞個の囚はれを呪ふ人には、其の將に立つべき型に新舊良否の區別はない譯である、要するに滿足は主觀的である。古い型に嵌り、古い思想を執り、社會のコンヴンションに盲從する人でも、苟も其人に滿足さへあるならば、私は之を囚はれぬ人と稱たい。

○金剛石の幾粒よりも麥の一粒が鷄にとりては遙かに有難い、價値は實に自己に在らねばならぬ。私は自己ありて始めて宇宙ありと信ずる者である、又、宇宙の中心は實に自己に在りと信ずる者である。彼の茫漠たる天、此の悠久なる地は、吾人が眼を開いてる間、吾人の眼前に展開せられてるではないか。何を苦しんで天に跼まり地に蹐して蠢々たる蠕虫を學ぶのであるか。

○各自の手、各自の足、各自の眼・耳鼻口は要するに各自の滿足を得んが爲の天與である、既に手あり何ぞ其の用を爲さゞる。既に足あり何ぞ其の用をなさゞる。眼耳鼻口亦然りである、彼の手を縛し彼の足を折り眼耳鼻口を塞いて自ら桎梏の苦を致すもの吾人は之を井底の痴蛙と呼ぶ。井底の痴蛙、如何して閑雲野鶴の身を知らう。

○さりとて此處に云ふ滿足とは廣義の滿足であることは無論である。私はこの滿足と云ふコンセプションの中にエピキルリアン派の滿足以外に道義的滿足をも含めた積りである。然し其の何れが高尚にして且人道的なる乎は知らない、否、高尚とか人道的などの語がすでに私の腦中にない。

○以上を前提として私は「故に道德は一種の贅澤品である」と云ひ得るだらうと思ふ。骨董癖の人が古畫や古刀劍を賞翫する如く、或る一部の人には道德なるものが古畫や古刀劍以上の其人の生命ともなり賞翫ともなり得るのである。併しそれと同時に骨董癖の無い人に無理に古書畫や刀劍類を勸めることが出來ぬやうに、自分が道德に權威を認め居るからと云つて之を人に强ゆるは愚である。

○道德は自己滿足の一資材に過ぬ、之を人に勸める性質のものでない、隨て自己が價値を認め權威を認めない道德に叩頭する必要は決してあるまいと思ふ。

○嘗て公開演說を聽いた。先づ其の演題に驚かされた、次に其の侃々諤々の辯に驚かされた。そして愛國の志士、憂邦の忠臣を目のあたりに見、懸河滔々雄豪の思想を聞いて心怡々如として階を下つた。併し會場から出て戸外の冷たい空氣に觸れて、今夜の辯士の各々が果して自己滿腔の熱誠、渾身の眞摯を以て演說したのだらうかと思考した時私の胸の底には云い得ぬ寂しい感が流れた。私は其時、否、熱誠

眞摯の態度がなかつたならば迚もあんな演說は出來まいと無理に其の寂しいを感抑へた。併しそれから再びと公開演說を聞きに行く氣はなくなつた。

○眞摯熱誠は人を神化する。私は嘗てフレデリック大王傳を讀んで、彼が劇藥を懷にして戰に臨んだのに至るや一種の衝動を禁し得ない。目にあまる敵軍を眼前に抑へ自己の衣囊中には一瓶の劇藥が靜かに藏まつて居ると自覺した當時の彼の眞摯は實に羨しい限である。私はこんな人から始めて眞摯の聲が聞き得るだらうと思ふ。

○吁哉眞摯の聲を聞き度い、併し私はとても現在私の周圍に在る人からは迚も此の聲を聞く事が出來ないと斷念せねばならぬのを悲しむ。もう人の聲に飽いた。半夜人靜かるな時、荒漠の原頭に立つてハレー彗星の聲でも聞かうではないか。

○終りに臨んで、冗漫の言が猥りに貴重の紙面を汚したのを謝する。矛盾もあらう撞着もあらう然し其間に一道の流が貫いて居るつもりである。其の一道の流を發見せらるゝならば私は滿足する次第である

海軍記念日の翌々日（無外生）

天才と凡庸と魯鈍

どういつても世の中に天才と凡庸と魯鈍との三通りの人間の居る事は爭はれないこれは後天的に出來た差別ではなく多くは生れつき然るのであつて凡庸の頭を持つた人を天才にしやうといつても。魯鈍な人をせめて凡庸の域に達せしめやうとしても中々そうは出來る事ではない。しかし敎育の力と發奮的努力とは凡庸却て天才を凌ぐやうな事業もやる、魯鈍も相應に名をなす事も出來やう。

玉磨かざれば光なしといへば陳腐な言ではあるが眞理を顯はして居る。如何なる天才も切磋琢磨せられざるは決して炎々天に沖して萬民その光に眩惑せられるやうな靈火とはならないのである。殊に天才にはよく自信のないものがある。自信のないのではなからうがとかく天賦の秀才には自ら努めず、自力を知らないものが多い。ゲーテのやうな稀世の大天才でもシルレルといふ刎頭の友が居て督勵して呉れなかつたなら或は幾層の光彩を減して居るであらう

天才と狂人とは頭腦がよく似て居るといふ。極端

と極端と却て相接近して環狀をなすのは奇といつて天才のやる事はよく常軌を逸して居る。そして大抵はその才の向ふ所止まるを知らざる慨がある。世の中はこの種の人物がなくてはとても發達しない。しない事もなからうが遲々として面白味も何もあつたものでない。幸に天才が出て呉れるので溜飲の下るやうな行動をやる。彗星的に出沒して世人の惰眠を醒まして呉れる。

しかしその種の人間ばかりだつたら世の中はとても治まらない。天狗ばかり揃つたら鼻の鉢合せをやつて秩序なんかあつたものでない。さればこそ凡人の最も必要な事がわかつて來る。

凡庸な頭ではとても人の意表に出でゝあつといはせるやうな事は出來ないであらう。しかし努力次第では隨分わらい事をやるのである。

のろまな人間に至つては一寸養ひ難いといふ感がある。しかしこれでも藤樹先生が良佐とやらを敎へたやうに精根を盡して敎へてやると一寸立派な人になるのである。たが敎育の目的はこんな性質の人間をよくなすのは第二の事である。

孔子も曰つた通り上智と下愚は中々移らない。されば今日の敎育は凡庸を主眼としてこゝから出發せねばならぬ。敎育即ち凡人の養成でなくてはならぬ。そして今日の官立諸學校は誠にこの方針を取つて居る事は疑ひもない事實である。しかしながら物事は中庸を得るといふ事は實に容易な事ではない。ともすれば偏するにはやむを得ないであらう。少し位偏するのは異議はない。しかし同じ偏するならむつかしい方に偏して貫ひたい。凡人敎育といふ事が少しでもどちらにか偏するなら魯鈍なものを養成する方に傾かずに天才を養成する方に偏して貫ひたい。

殊に高等の敎育にあつては被敎育者は大抵凡人である。天才も居やうが兎に角魯鈍な人は含むで居ない。されば凡人敎育が中庸を得がたいならば寧ろ幾分天才敎育の匂があつて欲しい。魯鈍な所謂低腦兒敎育の面影がほの見ゆるのは悦ばしい事ではない。敎場で惰氣を生ずることのない位にはありたいものである。

ちやんと一点の疑ひもないやうにして行かねば横文字は讀めぬといふやうなやり方では、洋書を解し

得るといふだけに一生涯を費すも覺束ない氣がする人はどうしても四圍の境遇に支配される。東都にあつて忙しく歩いた人も田舍に歸れば悠々として歩調は自らゆるんで來る。人間の弱点か長所かは知らぬが止むを得ない事である。噛んで含めるやうにして貰へば消化するに誠に骨が折れない。しかしそれでは胃袋は却て弱くなつて筍でも食へば生水が湧くといふことになる。こんなみじめな胃袋にならないやうに努力のヒントを與へて貰ひたい事を一部の教育者に希望する。

人格なき藝術

今の文藝美術に從事する人には決して凡庸な人ばかりではあからう。思想もあれば信念もあれらう。しかし何となく飽き足らぬ心地のするのは人格なき藝術であるからである。藝術の士は道德を以て律しがたいとは勿論である。ダンテのやうな大天才でも道學先生の眼から見たら豈に驚くべき異端であるかもしれない。彼等の眼には可憐なるフランチエスカはそこらの淫奔な娘と撰ぶ所がないであらう。我等の喧しくいひたい人格とは決してそんな偏狹なものではない。否、そんな一にも道德二にも道德と無上に道德を振りまはすのは、寧ろ藝術の賊である。彼等は美しい思想の泉も神韻漂渺たる空想の世界も、皆これを道德の一点張りで壓へて涸らしてしまふのである

藝術の士は道德を超越すべきである。しかし超越するといふのは之を破つて進めといふのではない。眼中に道德を見ず、美しく崇高なる藝術の國を望んで貰ひたいのである。然るに誤れる今日の藝術家は下劣なる品性をその作品に顯はすに過ぎない。金錢上の事で問題になるやうな藝術家が羽振りをきかすを見ては人格なき藝術を呪はざるを得ない。

我々の向ふ所は實に廣い。しかし何の業務を取るにしても藝術は全然不必要なものではない。藝術なき人生は地べたを匍ふ生活である。眼に入るものは土くれに過ぎない。少し地上をはなれた感じを得たいのは啻に獨歩のみてひあるまい。而しこの趣味を教育家の多數が解してくれるのを望むのである。

人格なき藝術の跋扈は畢竟するに藝術家の地位の卑きに起因するのである。（以上精）